

まめど わた  
豆渡の渡し

むかーしむかしは、鎌倉時代のいつごろかのお話と思われます。尾張の国の草井村江南市草井にはひろーい木曾川の南沿いにある部落で、そこには草井の渡し場がありました。そして、その渡し船で向こう岸についた美濃の国の少し入ったところに、下男を二十人ほど使い、夏は大豆ばかりを作っているのです、大豆長者と呼ばれる大きな屋敷がありました。

ある年の夏になったばかりのころです。長者は下男たちを集めると、いつもの年のように

一石五斗約二七〇リットル大豆の種を渡し、あちらこちらにある自分の畑へまくように申しつけました。

ところがところがです。この部落の前年は、米や麦、野菜までが不作だったので、食べるにひもじい思いをしている毎日でした。下男たちは畑でこのたくさんある大豆の種を見ると、急に食べたくなくなり「一石五斗もある大豆だでしょう。五斗ぐらいは食べても、うすーくうまくまけばわからんはのう」五助がちよつと首をすくめていいだしました。するとみんなも腹をへらしていたので「そうだ」「そうだ」「そうしよう」などと口々に賛成して、ついに大釜を持ってきて大豆を煮はじめました。



五斗の大豆を食べ終ってもあまりにおいしかったので、下男たちはわれを忘れて、また五斗の種を煮ると食べはじめました。つづいて最後の五斗にも手をつけ食べはじめましたが、やっと満腹になったときには少しだけ残ったけれど、一度煮てしまった大豆のこと、もう芽をふく種にはなりません。いいだした五助は心配になつてきて

「長者さまに、どう話したらいいのかなう」

こんどは暗い顔をして相談をもちかけました。しかしこれといったよい考えはなく、その日はだまったままわが家へと帰っていきましました。

三日ほどたって、下男たちが大豆を食べた畑にやってくる、大豆を煮る前に水洗いをしたところに、たった一本だけ大豆が生えておりました。

それからの下男たちは長者にそしらぬふりを  
して、かわるがわるに一本の大豆の苗を、だいに  
だいに育てました。そのうち、下男たちの願  
いが通じたのでしようかその大豆はすくすくとのび  
て、二カ月ほどもたつと、今まで見たことも聞いた  
こともない大木になっていきました。

やがて実りの秋になりました。下男たちは、  
大喜び。大木にのぼって一生けんめい大豆のさ  
やを取ってから実にすると、それはなんと五石余り  
にもなったのです。

取れた大豆をすべて長者の倉に納めた下男た  
ちは、次に大豆の大木をやつと切り倒し、五台の  
車にのせると声をはり上げ、木遣唄を唄いながら  
長者の屋敷に引きこみました。



「こ、こ、こりやあ、どうしたことだ」  
話を聞いて腰をぬかささんばかりにおどろいた  
長者は、しばらくの間ボーッとしておりました  
が、そのうち



「このふしぎな大豆の太木で船を作ろう。そして  
 前の木曾川に浮べて渡し船にするのじゃ。うん」  
 自分でそう返事をする、翌日には船大工を呼  
 んで一隻の船に仕上げました。  
 その後、大豆の太木船は乗り心地が良いと近在  
 の評判になり、木曾川を渡る多くの人たちの足  
 となつて親しまれました。

しょうわよんじゅうよねんしがつついたち あいぎおおはし かんせい  
 昭和四十四年四月一日に愛岐大橋が完成す  
 るまで、愛知県側は草井の渡し、岐阜県側は前渡の  
 渡しとしてつづいた渡し船の、鎌倉時代のその  
 歴史の中には、大豆の「豆」の字をとったのか、  
 「豆渡の渡し」と書かれた、古い記録も残ってい  
 るそうです。